

序

この本は三部に分かれる。一は「自分の畑」十八篇、一九二二年の作。二は「オアシス」十五篇、一九二三年の作。三は雑文二十篇、「児童の文学」など三篇のほかは、みな最近二年間に折りにふれ書き綴った文章である。

この五十三篇の小文は、一言言っておくが、別に批評などというものではない。批評とは主観的な鑑賞であって、客観的な審査ではなく、抒情的な論文であって、血気の指弾ではない、とわたしは信じている。しかしながら肯定形で述べられた点については実際わたしはそんなに自信がないし、否定形の部分についてもやはりいささか自尊心が必要である。だから真の批評と偽のそれとのどちらにも就くことができない。簡単に言えば、これは紙に書いたわたしの談話でしかない。それよりも生硬な部分がたくさんあるけれども、口で言うのに比べればあるいはもう少し明白であるかもしれない。

一昨年夏、西山で療養していたころ、「すぐれた仕事」という雑感を書いて、「他人の思想がどうも自分のよりすぐれ、他人の文章がどうも自分のより美しい」から、われわれは書くのを減らして翻訳を多くすべきで、それこそがすぐれた仕事なのだと言った。月日ははや三年、すぐれた仕事は依然やらず、何十篇かつまらぬ文章を書いてしまった。言えば慚愧をまぬかれぬが、よく考えてみると必ずしもそうではないのだ。われわれはあまりにも不朽ということを求めすぎ、社会に有益であろうとしてあまりに自己を抹殺してしまう。しかし不朽とは決して著作の目的ではなく、社会に益あることも決して著者の義務ではない。ただそのように考えたから、そのように言おうとする、これこそがすべての文芸の存在の根拠である。われわれの思想がどのように浅陋であろうと、文章がどのように平凡であろうと。自分が言おうと思えば、大胆に言うのがよいのだ。文芸は自己の表現に過ぎないから、凡庸な文章はまさしく凡庸な人間の真の表現であり、高雅であつても虚偽の言葉を語るよりはずっと誠実である。

世間は天才をバカにする。バカにしつつも天才を崇拜する世間はまた凡人を軽蔑する。人々は荒野の叫びを聴こうとはしない。しかし酒の肴や茶飲み話については、先賢の名によって叱斥を加える。これはいずれも誤っている。思うのだが、世人の心と口とがもしことごとく虚偽によって閉ざされてしまわない限り、わたしは「愚民」の衷心からの訴えに耳を傾けたいし、そうすれば大芸術家が与えてくれるのと同じような慰めを得ることができるはずである。わたしは文芸の愛好者である。文芸の中で他の人の心情を理解し、文芸の中に自分の心情を探り、理解されることの喜びを得たいと思う。この点でもし満足が得られるならば、わたしは感謝する。だからわたしは天才の創造を享樂——わたしはそう思うのだが——し、また凡人の話をも享樂する。世界的な批評家フランス（Anatole France）は『文学的生活』（第一巻）*で言っている。

著者が自分の生活、怨み、喜びそして気がかりを述べるとき、彼は決してわたしたちを厭きさせることはない。……

したがってわれわれは大人物の書簡と日記、そして彼ら書いたものをあのように愛する。彼らがたとい大人物でなくとも、彼ら何かを愛し、

何かを信じ、何かに望みを託してさえいれば、ただその筆先に彼ら自身の一部分を書きとどめてさえいればよいのである。もしもこのことに気づくならば、かの凡人の心は確かに一つの驚異なのだ。

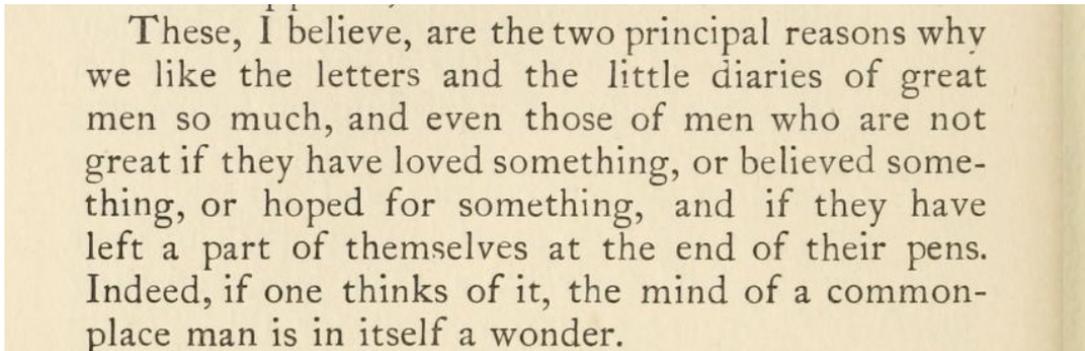
わたしは自分でもこれらの文章が拙くこなれていないことを知っている。だが自分の言いたいことは言うことができる。わたしはふだん友人の話を聞きたがるし、いまでも想像の中の友人を求め、わたしのくだらぬ閑談を聞いてもらいたがっている。すでに自分の過去のバラ色の夢がすべて幻であったことはよく分かっているが、まだ想像の中の友人を、凡人の心を理解することのできる読者を求めている。——これは生きている人間の弱点であるが。わたしはこれらの文章が他の人にとって何か役に立ったり、あるいは幾らかの愉悦を与えることができるだろうとは思えない。わたしはただ凡庸な自分の一部分を表現しようとしただけで、その他に別の目的はない。そういうわけでわたしはこの二年間の文章をすべてここに収めた。多くの諷刺的な「雑感」と意に沿わぬ一二篇の論文を除いて。その中にはまた遊戯に近い文章、たとえば「山中雑信」などの、もともと「雑感」の類であるが、それもわたしの癖を表しているから、この文集に収めることにした。

わたしは寂寞のために、文学に慰謝を求め、雑多な読書をし、むやみに文章を書いた。学者の一笑にも値しなかりうが、自分にとってはかなりの効果があったと思う。あるいは国内にわたしと同じ心情を持つ人がいたなら、この雑文集をその人に捧げよう。もしいなければ、むろんそれまでである。——どのみち寂寞にはそれ以上の寂寞というものはないからである。

一九二三年七月二十五日、北京にて。

※初出：1923年8月1日『晨报・文學旬刊』

*フランス (Anatole France) 『文学的生活』 On Life and Letters. trans. by A. W. Evans, Jane Lane 1910. p.76: The journal of the Goncourts.



These, I believe, are the two principal reasons why we like the letters and the little diaries of great men so much, and even those of men who are not great if they have loved something, or believed something, or hoped for something, and if they have left a part of themselves at the end of their pens. Indeed, if one thinks of it, the mind of a commonplace man is in itself a wonder.